

服部君と東京大学追分寮で暮らしたころ

石川, 雅明

<https://doi.org/10.15017/1523906>

出版情報 : 歴史を歩く時代を歩く : 服部英雄退職記念誌 : とことん服部英雄, pp.238-242, 2015-03-31. 九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室

バージョン :

権利関係 :

服部君と東京大学追分寮で暮らしたころ

石川 雅明

本郷追分寮で服部君とともに暮らした日々

○追分寮入寮

一九六八年（昭和四三年）入学の服部君や小生の本郷進学は、留年しない限り、東大闘争による全学ストの影響で半年遅れて一九七〇年の秋一〇月だった。

二人はともに、下宿などで一年過ごした後、追分寮には、一九七一年一〇月頃相次いで入寮した。

〈寮名の由来〉

寮名の「追分」とは、近くの、農学部前辺りの「本郷追分」による。ここで、鶯に抜ける中山道には曲らず、本郷通りを直進すれば、駒込、その先は岩槻、さらに日光に抜ける。日光御成街道である。「追分」とは分岐を意味して、江戸時代からの交通の要地だったことになる。ここから、後述する、追分寮生にとつては「いわく付き」の文京女子短大（現「文京学院大・文京キャンパス」）を通過して、バス停でひとつ先が「向ヶ丘一丁目」であり、その真ん前が「追分寮」の正門であった。向ヶ丘なのに追分とはこれ如何に？

さらに、なにせ農学部のキャンパス内には本郷六寮のひとつ「向ヶ岡寮」が別に存在したのだから。ちょうどそのころ昭和四五年年前後に実施された新住居表示制度による町名・町割り変更が絡んで、こうしたややこしいことになったらしい。

〈追分寮のその後と現在〉

なお、我々が「追分寮」は、これも後述する八〇年代前半の本郷「新々寮建設」

問題の荒波を突破し、二〇〇四年春に閉寮となるまで存続した。これは駒場寮の強制執行による廃寮が二〇〇一年だったことと比べても特筆されていいことだろう。しかもその六年後、同じ狭い敷地に二〇一〇年（平成一四年）に、一四階建ての現「追分国際学生宿舎」が建設されている。「寮」の名前がなくなり「宿舎」に置き換えられているところに「学寮」生活の終焉を見て間違いはなからう。

しかし、休止状態に近くはあるが、ネット上に、この旧「追分寮」の記念HPが存在し、簡単に検索できることは、まことに喜ばしいことである。

〈追分寮の姿〉

さて追分寮の雄姿は、一九六〇年前後の写真だが、本稿の舞台の七〇年代前半でもそっくりそのままであった。以下の写真を参照されたい。

〈寮のたたずまい〉

追分寮には、不思議なことに、門内に、コの字型で凹部を両側に向けたかなり大きな民家が一軒あり、人間国宝「〇」氏の工房兼住宅であった。この民家の住人の方々と同じ門をくぐっていたわけだ。初期の寮生が、深夜泥酔の勢いでこのお宅の御当主の特に愛でる樹木の前で剣道・寸止めの練習に及び、もちろん勢い余ってこれを痛めつけ、御当主を寝込ませてしまったとされている。「東京大学 学寮15年史」（東京大学学生部、一九六一）にて、本人がその思い出を懐かしんでいる。（なお、本稿の一九六〇年



までの学寮関係の情報は、格別断らない限り本書による。）

追分寮は平屋建ての棟二棟と、二階建ての棟一棟および寮食堂・小浴室からなっていた。

戦後の学生の居住・生活条件が極端に劣悪だったとき、学寮建設促進会基金により、当時建設中だった女子工員の寮を大学が買い取って一九四八年に開設されたという。最初付設されていなかった食堂も一九五八年には他の本郷寮にかなり遅れて整備された。当時の定員は九〇名という数字が残っているが、これは八〇―一〇畳間に三人同居させるという戦後の最悪の住宅事情を反映しており、おそらく共同スペース（「娯楽室＋電話ボックス」や寮委員会室や寮医室や寮務主任室などを全部収容人数に繰り入れて数えたものだったはずだ。五畳半や六畳で二人が標準であり、小生たちの在寮時では定員は六〇人台ではなかったか。本郷寮では、前述した農学部キャンパス内の「向ヶ岡寮」とならんで、三桁の定員になる他の四寮にくらべ定員の少ない木造寮（「旧寮」という。）だった。

○そもそも学寮とは

〈学生の厚生支援と自治精神の発揮―英国学寮大学の理想との違い〉

前記の「学寮15年史 一九四五―一九六〇」は、学寮の性格にも、言及している。英国の専門の「チューター」が在寮居住して学問上の指導も行う、学寮大学があるが、当初学寮の建設に力をいれた南原総長は、これを理想としたものの、現実の東京大学の諸学寮は、学生の宿舍と食事の確保という戦争直後の要請・制約から逃れることはできず、上記の英国学寮とは根本的に違ったものではあったことが指摘されている。（上掲書 p. 25, pp. 41-43）

実際のところは、昭和二〇年九月制定二二年四月改正の「東京大学学寮一般規則」（同書 p. 311）が、二〇―一〇年まで生き残った。その第一条は「学寮は自治精神に基づき規律ある団体生活を営み総合的学風の振興に務めるものとする」と

あった。ここから、上に指摘した学生生活の厚生の支援の他に、学生の自治・相互交流への志向が読み取れる。この学寮一般規則が、二〇〇四年追分寮廃寮まで継続したはずだ。（正確な追及は本稿執筆時にはできなかった。しかし、現在の豊島・追分「国際学生宿舎」は平成二〇年以降制定の管理規則のもとで運営されている。）

〈「自治寮精神」と「切磋琢磨」の継承と戦後学生運動の影響から「新々寮建設」問題〉

「バンカラ」と「切磋琢磨」のやや旧制高校的全寮制の全人格的交流、これが旧制高校ではそのエリート意識と盾の両面とをなすという重大な矛盾を抱えていた面は否めない。しかし、「切磋琢磨」！を旨とする学寮ムードと「自治寮」精神は我々の時代まで、次第に希薄になりつつも、連綿と残っていたように思う。

これが、のちに八〇年代前半、文部省⇨学生部厚生課・学寮委員会（同課長と、各学部代表教授らで構成）が主導した本郷の「新々寮建設」に対して、追分寮が本郷六寮の反対の先頭に立ち結果的にこの時期の建設阻止（当局にとっては「断念」に至った事情と結びついていたと思われる。）

〈自治寮精神と切磋琢磨は如何にして継承されたか〉

さて、寮生活の中でそれらが発現された「場」がいくつかあった。

それは、寮食堂であり、娯楽室であり、狭隘ではあるが共同浴室（洗い場と浴槽で最大三人収容）であり、せいぜい一棟で一桁〜十数室しかない三棟の寮舎の各部屋での共同生活だったろうか。

同室の相手とは、互いに気が合つて望めば、の話だが、生身の生活と議論・思想をぶつけ合うこともある全人格的付合いつまり「切磋琢磨」といえるものであったろう。気が合わなければ寮内の他の部屋に機会を捉えて移る寮生がかなりいた。

こうした寮生活の各場面を、服部君も小生も共に過ごしたわけであり、その「時」をもう少し掘り下げて顧つてみたい。

○東大闘争の前後の追分寮と寮生活

服部君や小生が入寮する前に属する、六八〇七〇年ごろの東大闘争時の話は、当時寮のヌシと呼ばれる中には一〇年にもなる在寮期間を持つヌシ的寮生からの伝聞に頼るしかない。こうした人はどの寮にも一人はいたもので、有名人では田無寮に、政治学者の故小室直樹氏もその一人であつたらう。そうしたヌシの一人、東大ウエイトリフティング部創設者でもあつたYさんからの話によると、日常の寮生活が継続する中で、異彩を放つたのは、やはり学生運動党派の「活動部屋」の存在だった。

駒場寮では、戦争直後から当局の強制執行により廃寮になった二〇〇一年まで活動部屋の存在はむしろ常態ではあつたが、本郷で珍しいことだった。ところがいわゆる東大闘争時は、追分寮でも寮内の特定の部屋が、いわゆるセクト（党派のこと）*主義学生／青年同盟+*派（*派）とその大衆活動組織？戦線などの類の、「活動部屋」と称する活動拠点になつていたわけで、学内で闘争や・政治活動があるたびには、寮外生も含めた活動家諸君が、コノ部屋に戻ってきて夜中まで「総括会議」などを開きガンガン大声で議論するのだから極めてうるさかつたといわれる。基本的な日常生活を送る一般学生には、こうした迷惑な状態が一二年は続いたものだったらしいが、我々の入寮時にはそれも収まつていた。

そうしたわけで闘争時にはままあつたかもしれぬ、入寮選考の党派的偏向・差別も、我々の入寮時にはまったく感じられなかつたと思う。もちろん個人的には、自治会活動や更に踏み込んだ政治活動もしている寮生は複数いたはずだが。

ただ、すでに三〇歳台後半だつたと思われる、寮外の人間で、闘争時駒場の某派を指導した大幹部が、寮内に表れ洗濯室に備え付けの、まだ旧式にはなつていなかった2槽式電気洗濯機を使用していたのは、なんともうらぶれた雰囲気を見せていた。おそらく闘争時出入りしてなじみのあつたに違いない。「追分寮」に現われたのは、対立する某派との内ゲバで殲滅されるおそれも薄らいだからかも知れないのである。もつともこれは服部君が修士課程を3年で終え研究室の助手に採用され、めで

たく就職・退寮された後も小生が在寮した頃のエピソードだったかもしれない。（小生は修士課程の二年の途中退寮も含んで博士課程満期退学の八四年三月まで、無慮一〇年半の長きに亘り在寮することとなつたが。）

○寮生活グラフィティ 服部君の**馬力など

〈残食獲得〉

寮生活の楽しみに、「残食獲得闘争！」があつた。寮生が申し込んだ朝食・夕食はそれぞれ午前、午後の一〇時をまわると予約権を失い、他の寮生が食べてもよいことになつている。これを狙つて、金欠ないし空腹ないし大食漢の寮生が虎視眈々とこれを狙つたものだ。小生も服部君もこの闘争には「慎ましやかに」参加したことにしておこう。

〈娯楽室での「切磋琢磨」——服部君に「瞬発力」〉

食事後のひとは、寮の門横にあつた棟の、8畳ほどの娯楽室で、備え付けのTVを見るか、新聞（朝日だつたと思う）を読んだり、世間話・雑談にふけつたり、花札、トランプ・麻雀に興じたりしながら、理科系・文科系並びに、年や院生・学部生かを問わぬ付き合い交流があつた。新入寮生の寮生活デビューの場ではあつた。この場面での服部君は「**馬力」を発揮されていたことであろう。精力のあまつた男同士ではまますることだつたが、ふざけで「解剖ごっこ」を仕掛けあうことだつた。ある時、他の二、三人で結託して彼を組み伏せていざ、といとときに、大変な瞬発力が一閃し、彼に襲い掛かつていた全員が跳ね飛ばされたことだつた。

〈ボート部員、乗鞍寮委員の服部君と作歌〉

かの「瞬発力」も、彼がボート部に所属して鍛えていたからだど、悔し紛れもあつて後で噂しあつたものだ。夏は、大学運動会所属である「乗鞍寮」の寮委員も務め、山に親しんでいたようであり、その活動の楽しさを小生に心底から語つてくれたことがある。また、ロマンティックな面もあり、興じれば三十一文字もひねつてみせ、かつ

それを我々に朗誦してくれたこともある。

〈三畳部屋を「俊敏にも」独占〉

では、ただの大人（たいじん）だったかという否、そこは尾張名古屋出身のDN Aも發揮され、かなり利に聡く俊敏でもあられたと思う。いささか偏見めくが、それが証拠に、もちろん運も味方しただろうが、その当時は特権的な寮内唯一の一人部屋―を、くじで引き当てて見せたことだ。三畳ではあれ、プライバシーを独占行使できる部屋に早々と移られて、在寮三年半のうちそのほとんどの期間、その生活を「満喫」しつつ、学問にも励まれたと思われる。片や一〇畳で三人の部屋も、まだ複数存在していたのだから、それから見れば垂涎の境遇ではあった。

ただし、「満喫」の中身については寡聞にして知らないし、誰にでもよくあることだが、なにやら失恋したと嘆いておられた以外、ほとんど忘れてしまった。院生仲間一、二人を交えると肩寄せ合うその狭さで、時々女性も含めてコンパを開いておられたのを羨ましく思ったことだ。人懐っこさ、あったかい社交性は、また天与のものであられるのは友人・知己の大方の賛意を得られると思うが、それが当時から存分に發揮されていたのだ。

〈服部君寮委員長も歴任：結果として文京女子短大寮建設阻止に〉

この時期に小生も寮委員長を一期、半年務めた。たしか小生がお願いして服部君が小生の後任になったはずだ。だが、その任期当時、近くの文京女子短大が追分寮の裏の空き地を買占め「女子寮」を建設する計画が持ち上がったが、日照権がうるさく言われ始めた時期であり、女子寮の通用門を追分寮の敷地にもうけ、本郷通りに直接出ることができるようにしよとの働きかけが女子短大側から東大当局にあった。なんでも民法上そうした通用口と寮敷地内通行権を女子短大側は行使できるとい話だった。

これに対して、先述の寮敷地内の民家、人間国宝「O氏」の工房もこの通用門や日照権侵害に対して敏感に反対したので、このO家と共闘して、服部君と共にO氏

宅を訪問して共闘策をねった思い出を、今回彼が小生に喚起してくれた。結局、寮生大会で反対決議をあげたり、学校創立者のしつかりもの、高齢の女性理事長と面会交渉でやりあたりして、断念させることに成功した。O氏の人間国宝の立場からの文部省ルートも功を奏した大きな理由だったかもしれない。

〈石井先生からの電話と学問上の挿話〉

最後にもうひとつ羨ましく思ったのは、服部君には、学部学生のころから、指導教官の石井進先生から頻りに電話かかって来たことである。

当時は寮生で個人電話が引ける時代ではなかった。電話は、誰からであれ、娯楽室にあるピンク電話にかかってくる。昼間は掃除も仕事の「寮母」さんが電話番号してくれ、夜は四、五名の寮委員か、娯楽室にいる寮生が電話に出て寮内放送することになっていた。今なら個人情報にあたってイケナイのだろうが「*君、彼女から電話だよ」との寮内放送が流れたり、親しい寮生が伝言を聞きに「代返」に出てくることもあったわけだ。こういうわけで、服部君が指導教官にかわいがられているなあ・・・というのは小生のみならず服部君を知る寮生には遍く伝わっていたかと思う。これは教官の方針にもよるので一概には言えないが、教育学部の当方には一度もなかったことだった。

また、服部君は当時から、自らの学風に言及して、「確かな古文書解読技術など実務的能力を基礎として大切にしたい。これなくしては、研究方法論や問題意識ばかりが先行した砂上の楼閣的学習・研究になる」という意味のことを言っておられた。当たり前のことだろうが、このことを聞いて小生は当時から耳が痛かったので、今も鮮明に覚えているしだいである。

〈共に「追分寮」を退寮：一九七六年三月―ただし片や、国史研究室助手へVS

此方、「大学院教育学研究科（社会教育）」修士課程にやっと入学したが……現在まで〉

服部君の助手就任が、修士生活三年を経た後の一九七六年であり、小生も教育学研究科社会教育コース修士課程に進学していったん追分寮を退寮した。これを持つて、彼と小生の「切磋琢磨」の寮生活は終わりを告げたことになる。共に命を燃やして生きた時代の時間の一部を共にできて、大変光栄にも感じているし、自身の目つき・生き方の方向が、上昇志向から、地域・自分中心に変わる大切な過程であつたことを、今も誇りをもつて思い出すことができるといわせていただこうと思う。それも服部君を含めた多くの寮友との交流のおかげの面があつたといえる。

小生はその後博士課程進学時に再入寮し満期修了まで、七、八年在寮して過ごすことになる。その後研究者にはなれず、郷里の金沢で学習塾を開き今日に至っている。数年前彼が金沢に学会・視察でやつてきたとき、拙宅にお泊めして旧交を温めることができたが、学生時代と変わらぬ暖かさで接していただいたのも良い思い出であつたし、昨年「全国歴史資料保存利用機関研究協議会」の年次大会が九大で開催されたときも、それに参加する小生をわざわざ、前日に新キャンパスで歓待していただき、こうして追分寮の学寮生活を振り返る機会を授かったことに重ねて御礼を申し上げます。